

氏名	村井 大介		
学位の種類	博士（教育学）		
学位記番号	博乙第	2881	号
学位授与年月	平成	30年	5月 31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	公民科教師のライフストーリー研究 —教科観の形成要因の分析から教科への希望を構成する—		
主査	筑波大学教授	博士（理学）	井田 仁康
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	唐木 清志
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	國分 麻里
副査	筑波大学准教授	博士（文学）	岡本 智周

論文の内容の要旨

本研究は、ライフストーリーの語りから、教師が、公民科を如何に捉えながら実践し、公民科という一つの教科文化の確立と発展に関わってきたのかを、教科観の形成に着目しながら明らかにすることを目的としている。著者は、教師への面接調査を実施し、その言説を分析することで、研究目的を達成しようとする。その要旨は以下のとおりである。

序章で、先行研究を検討し、従来の研究では学習指導要領にかかわって教科観が分析されてきたが、教師が教科をどのように捉えて実践してきたのかといった観点がないことを指摘し、本研究の意義を明確に位置付けている。また、本研究の研究対象が公民科の教師であり、その理由を公民科が常に社会の変化にさらされながら社会へ影響を与える可能性が強い教科であり、教師がそのことを自覚しやすいこと、教授内容として価値認識が含まれることから教師自身の価値認識を意識せずにはいられないこと、平成元年度版学習指導要領で高等学校社会科が地理歴史科と公民科に解体し、その後も科目の改編があったことなどから歴史的な意味をもたせやすいといったことがあげられている。

第1章では、教師のライフストーリー研究の意義を検討している。著者は、教師の教科観に着目しながらライフストーリーを分析し、その教科観を自己形成史、共同体の文化、歴史を語る、の三側面に着目して教科観の形成要因を解明することで、教師が教科を見直すことができ、教師としての自覚が高められるとしている。そして、教師のライフストーリーの語りは、教科文化に何をもた

らすのか、公民科という一つの教科文化の確立と発展にどう関わってきたのかを分析することで、教科観の形成を追究できるとする。

第2章では、17名の教師の面接調査から、教師の個人史と教科の歴史の連関に着目しながら分析した結果、教師の教科観の形成について論じている。公民科教師の教科観の特徴は「社会の問題に向き合ってほしい」など授業を通して実現したい願望(希望)が込められていることであるとし、著者は、教師の願望(希望)に特に着目し、これは学習指導要領といった制度的な要請だけでなく、社会的要請や学問的要請、生徒のニーズを踏まえながら、自身の生い立ちや置かれてきた状況に即して形成されたと解釈する。特に、公民科は授業内容そのものがこれから実現しようとする社会を追究するものであり、教師自身もそれを強く意識しており、このような願望、希望については、多くの公民科教師がもつ教科観であり、他教科の教員にはあまりみられないと著者は指摘する。

第3章では、公民科教師の授業の変容過程を論じている。著者は、教師がライフストーリーの中で公民科の授業を如何に実践してきたのか、3人の教師の詳細な分析から追究している。勤務校の異動による授業の変容というライフステージの移行は、自己形成史という側目から教科のカリキュラムを変えていく契機となり、それは生徒との相互作用による結果であると著者は解釈する。

第4章では、著者は、教員が属する教育団体と「現代社会」の成立に着目する。公民科は、他の社会科系科目において過去や現状の理解に学習内容の重点があるのに対して、その内容が将来の社会を見据えていることを重視していること、教師が所属する研究会で教師同士が将来の社会を念頭におきながら授業開発を行っていることを指摘する。特に、公民科のなかでも「現代社会」が、公民科教師の希望に深く関わる科目であり、研究会の機関誌などで教師の希望を抱いた教育実践の紹介があり、研究会内で組織的な研究体制を構築して「現代社会」の希望を集約し、授業に具現化していったことが、多くの公民科教師の共感をえたと分析している。

第5章では、高等学校社会科の分科による教師の教科アイデンティティの葛藤について論じている。著者は社会科の分化を経て、生徒の切実な社会問題をとりあげられる公民科ができ、それが教師の固定的な授業観を打破し、生徒とともに「常につくる」という相互作用的な授業観への変化をもたらしている指摘する。こうした授業観の変化が、公民科の教科観に発展し、教師の教科アイデンティティを強めたとしている。

第6章では、本論文での分析、解釈を整理し、結論へと導いている。著者は、公民科教師に影響をもたらしたものを、以下の4点に整理している。すなわちその4点は、教科指導者としてモデルになる教師像の存在、自己を肯定する教育言説を自覚しそれに向き合う方法の検討、生徒に応じた教育観や教育方法の柔軟性、研究会などへの積極的な参加としている。

終章では、成果と今後の展望が記されている。著者は、教師がもつ願いや、教科に託した願い(希望)の先に、教科共同体、さらには教科そのものの発展があること、逆に、教科の変容が教科アイデンティティをはじめ、教師に影響をもたらしていることを本論の結論としている。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、教師個人に立ち返って教科を捉え直そうするところに独自性があり、従来の社会科教育学では、見落とされていた教師個人の教科観から帰納的に構築された、換言すれば教師のライフストーリーから積み上げられた研究成果として高く評価できる。また、一人の人間としての教師を、公民科という人間を追究する教科と関わらせることで、公民科をこえた教師としての成長、それが教育に及ぼす影響が実証的に論述され、社会学の観点を踏まえた教育学の研究として、学際的な研究としての意義も大きい。

平成 30 年 3 月 30 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第 11 条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。